Keio Research Center for the Liberal Arts

Newsletter 44

慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第44号/2024年5月15日発行

Contents

巻頭言　ぶ厚い囲いの外
特集Ⅰ　「基盤研究」「読書会」「学習相談」
特集Ⅱ　「教養研究センター選書」
特集Ⅲ　【教養研究センター 設置科目】
アカデミック・スキルズ／身体知・音楽／ゲーム学
特集Ⅳ　「創造力とコミュニティ研究会」「日吉行事企画委員会（HAPP）企画」
「教養の一貫教育」
特集Ⅴ　「情報の教養学」「研究の現場から」
活動予定
私の○○自慢

３月中旬 新宿御苑のカンザクラ

ぶ厚い囲いの外

教養研究センター副所長
鈴木亮子（経済学部）
Ryoko Suzuki

昨秋、町内回覧版（アナログ媒体！）を見て、外国にルーツを持つ子供達の学習支援のボランティア募集という案内を発見し、夫とその講習会に出ました。私の住む地域には98か国から来た人々が暮らし、国別に見ると中国、次いでネパール、韓国、ベトナム…にルーツを持つ方々がいるそうです。

ほどなく、海外出身の家族が近所に住んでいることがわかりました。母親はしばらく前に来日し日本語は少し話せますが２つの仕事を掛け持って忙しく、２人のティーンエイジャーの息子たちは母と暮らすために来日したばかりで日本語はあまり話せません。しかし、外国につながりのある生徒を支援する体制がある高校を受験するということで、夫が急遽、入試までの２か月間、数学の学習支援を引き受けました。

２人の若者たちは週２回我が家に来ては、日本語の問題文に悪戦苦闘していましたが、本番では式やグラフの問題に集中する戦略を立てて練習を重ねました。入試問題にはルビが振ってあるとはいえ、傍目には受験はかなり無謀な挑戦に見えました。しかし彼らは見事に合格を勝ち取りました！入学手続きや制服の手配などがある中、母親は学校からのルビ付きの手紙の意味がわからず、仕事を抱えて学校に容易に出向けず、何人ものボランティアが連絡を取り合いながらサポートを続けています。

一方私は、彼らの口座開設をサポートするために、先日ある都銀に一緒に行きました。しかし窓口の人は開口一番「ご予約はありますか？ご本人様は日本語がわかりますか？支援の方抜きでこちらのご説明がわからない方は、口座開設はお断りしています」と剣もほろろなので退散しました。翌日、地域密着を売りにしている近所の別の金融機関に電話すると「ハンコが依然として必要ですが、条件を満たす証明書類があれば口座開設は可能で、支援者が同伴ならなお良いし、日本語を母語としない方の口座開設の経験も豊富です」というので、すぐに彼らを連れてハンコ屋に駆け込みカタカナの印を作成し、無事口座開設にこぎつけました。

それにしても、たとえグーグル翻訳が巷にあっても、経済的理由でスマホもPCもない彼らには不便や苦労の連続に違いありません。心が折れる暇すらないほど彼らは毎日の生活に追われ、それでも会えば元気に挨拶してくれます。

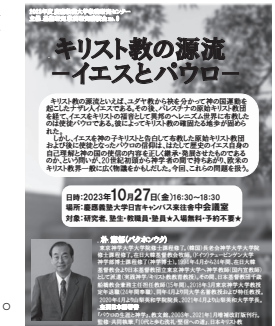
「知る人ぞ知る」事柄を知っていて「地の利がある」「その土地の言語を理解する」「スマート機器を所有する」人々を手厚く囲うように、タイパ・コスパ社会が成立していることを思い知らされます。兄弟が４月からの日本での高校生活を楽しいと思える日々、母親が安心して彼らを見守る日々が来るようにと願うばかりです。そして、教養というものが、生活の中に厳然と存在するそんな「囲い」をものともせず、中と外を自由に往来し、浸透し、やがて囲いを少しずつ崩し、その土地に暮らす一人一人の社会生活を守り潤してゆくようにと願ってやみません。

基盤研究

教養研究講演会　朴憲郁「キリスト教の源流ーイエスとパウローー」

2023年10月27日、来往舎大会議室において、山梨英和大学学長、朴憲郁先生による研究講演会がおこなわれました。「宗教」をテーマした研究講演会において、キリスト教を取り上げる四回目です。朴先生は、東京神学大学名誉教授でもあり、日本における新約聖書学の第一人者です。また、日本基督教団勝沼教会の副牧師として実際の伝道にも携わっています。今回の演題は「キリスト教の源流―イエスとパウロ―」、朴先生は、地上を生きたナザレ人イエス（＝史的イエス）を神の子キリスト（＝ケリュグマのキリスト）と告白して布教した原始キリスト教団、および、後に回心して使徒となったパウロの信仰が、キリスト教神学の中心にある（コリントの信徒への手紙一15章３節～11節参照）として、パウロのキリスト理解と布教方針を読み解きました。そして、最後の質疑応答で、朴先生は、伝統的な宗教とカルト宗教を明確に区別し、「宗教というのは、本来は非常に深いもの、哲学にも通じますし文学にも通じますけれども、そういう人間の教養にもなるし、広がりのある豊かにするものなのだという、そういう認識は少なくとも持ってほしいなという感じはします」と締め括りました。たいへん有意義な研究講演会となりました。

（小菅隼人）



読書会「晴読雨読」アイデアの系譜学

日吉を行き交う人たちの「アイデア交差点」を目指して

ふと来往舎の窓から外を眺めると、様々な人たちがキャンパスを歩いていることに、改めてハッとさせられます。日吉という学びの場は、授業教室で体感する以上に多様で複層的です。時に、他キャンパスからやってきた学生たちの声、（私にとっては）未知の分野を探究する先生方の四方山話、下校中にはしゃぐ中高生たちの賑わい、通信教育課程で学ぶ社会人学生の姿など、さまざまな「交流の風景」と遭遇します。こうした一つ一つの「つながりの小宇宙」同士について、何か接点が作れないかと思い「本とアイデアを持ち寄る」読書会活動を2023年６月より行っています。

今回は年末の小休止を活用し、第３回「メタファーの学、発想の土木工事」（2023年12月20日）および第４回「アイデアの栄枯盛衰、ことばの磁場」（2023年12月26日）を実施しました。第３回においては、比喩のもつ「つなげる力／変換する力」が話題の中心になり、こうした比喩のパワーをどういったメタファーで適切に、そして創造的に表現できるか、ことばのワークショップのような形で盛り上がりました。第４回においては、信濃町から医学部の学生さんが来訪し、日吉の１年生たちと混ざりながら「アイデアの栄枯盛衰」を「いきものモデル」で理解できないか、あれこれ試行する愉快な場となりました。創造的な混沌を目指し、2024年度も活動を継続していきます！　（若澤佑典）

学習相談

秋学期は、引用の方法や脚注に関する疑問など、レポート作成のなかでも少し踏み入った相談が多かったように感じています。引用に関する細かい注意事項や脚注の書き方などは、掘り下げると奥が深いため、相談員としても多くのことを考えられるよい機会だったと思います。また、私自身も引用や脚注に関して今までたくさん頭を悩ませてきたため、内心では相談者の方々にとても共感できたし、疑問点を共有できる学習相談の存在にとても意義を感じることができました。

2023年度は、比較的１年生の方々からの質問が多かったように感じていますが、これからは学年問わず、誰でも気軽に相談できるような場所になっていけたらと思っております。これからもぜひ、学習相談をご活用ください！

（黒木唯花　商学部２年）

＜選書刊行記念企画＞著者と読む教養研究センター選書 第３回

「『アーサー王物語』に憑かれた人々—19世紀英国の印刷出版文化と読者」

アーサー王伝承とは、アーサーという６世頃の人物に因んだ伝承です。その存在は不詳でありながら、西欧中世そして現代においても多くの物語が誕生しています。なぜか。一つの答えが15世紀英国のトマス・マロリー著『アーサー王の死』の出版です。選書では、1816年に刊行されたマロリーの二つのテクスト出版をめぐる競争に注目しました。序文に綴られた匿名編集者の憤りの告発文によれば、自分の企画を横取りされライバル本に先を越されたとのこと。出版競争の真相解明は「本のカタチ」から地道な事実を発掘し積み上げる探偵作業となりました。本のカタチを決定する判型の特定によって印刷用紙と印刷機を推定、さらに２つのテクストの印刷所要時間を算出するという過程を紹介しました。まず安形麻理氏には書誌学の視点から判型とはなにか、当時の印刷工程について補足深掘りをしていただきました。さらに高橋勇氏には、18世紀に誕生した「文学史」のナラティブの観点から、さらに原田範行氏には出版文化史の脈絡に1816年版を位置づけて論じていただきました。

質疑も途切れることなく、選書の論点を深めることができ、幸いアンケートでも「研究対象への温かな眼差しと熱量がすごく、刺激を受けた」、各話者が「お互いにとてもかみ合って大成功」との回答も寄せられ、この企画の面白さを実感いたしました。登壇者の皆様、司会の迫桂氏、本企画の考案者、商学部瀧本佳容子氏、広報から動画製作まで教養研究センターの皆様と慶應義塾大学出版会の皆様に心より御礼申し上げます。（不破有理）

教養研究センター選書24

「文芸共和国の歩き方 書棚を遊歩するためのキーワード集」

18歳の春、キャンパスの並木道を歩くと、爽やかな解放感がありました。図書館で本棚の迷宮を探検し、見つけた洋書をドキドキしながら手にとってみたり、サークルの部室を訪ねて、仙人のような先輩から旅行エピソードを聞いたり、外国語教育棟をウロウロすると、各部屋から異国の言葉が漏れ聞こえたりと、リベラル・アーツの場には「ドキドキとワクワク」が詰まっていました。時は流れ、30代の英語教員として日吉に着任し、「大学1年次の高揚感＝知の広がりとのファースト・コンタクトについて書いてみたい！」と強く思いました。教養研究センター選書の応募要項を見て、まさにこれだと筆を走らせた次第です。

本書は旅行ガイドブックを模倣し、知の世界を周遊する「動き」を、キーワード別に並べてあります。例えば、「引き写す／書き換える」や「並べる／編む」など、新たな本と出会った際、気に入ったフレーズをメモしたり、他の作品と並べて出会いの化学反応を起こしてみたりと、日々の生活で何気なく行っている「思考／動作プロセス」を分解し、その描出を試みています。また、思考の動き・読書のリズムを一つ一つ提示する過程で、私たちの生きる世界と過去の世界が「共振する」様子も明らかとなります。「18歳の読書」体験を「18世紀の文芸世界」研究へと変換していくことで、執筆者の専攻領域紹介にもなっています。執筆・改稿・出版作業を通じて、日吉の同僚や編集者の方、かつての授業の教え子たちとあれこれ話す機会ができ、書くことの愉しさを実感した半年でした。みなさまに感謝申し上げます。（若澤佑典）

《2024年度教養研究センター選書　原稿募集》

教養研究センターでは、2003年度以来「教養研究センター選書」を刊行しております。この企画は、当センター所属の研究者が、その学術研究の成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信して新鮮な知の一石を投じ、研究・教育相互の活性化を目指そうとするものです。

■応 募 資 格：教養研究センター所員（共同執筆も可）

■内　　容：研究分野は問わない。学術論文とは異なる啓蒙的な切り口で、先端的な研究成果を紹介し、学生や一般読者に新鮮な知の形成に立ち会う機会を提供するもの。

■申 込 締 切 日（予定）：2024年８月30日（金）

■原稿提出締切日（予定）：2024年９月30日（月）

●詳細は別途所員宛にご案内いたします募集要項をご確認ください。

※締切日につきましては変更になる可能性があります。

教養研究センター設置科目

アカデミック・スキルズ／身体知・音楽／ゲーム学

アカデミック・スキルズ（水曜クラス）

教養研究センターの設置科目の中では老舗中の老舗であるアカデミック・スキルズは、2023年度、新しい時代を迎えました。歌人で小説家で実業家。幾つもの顔をお持ちの小佐野彈さんの御寄付を頂くようになったのです。水曜クラスは、小佐野さんに履修者のプレゼンテーションをご披露する機会も賜りました。これまでにないパターンだったと思います。ここに記して感謝します。

とはいえ、よいことばかりがあったとも申せません。この授業は昔から通年でデザインされ、本年度もそこにこだわっていたのですが、やはりセメスター制が年々徹底してゆく中、通年での履修を続けて行く環境はますます失われ気味になってきていると言わざるを得ません。水曜クラスも履修人数だけで考えると、春に比べて秋は、ぐっと寂しくなりました。しかし、残ってくれる学生さんにはやはりそれだけのものが確かにありました。履修意欲も問題意識も極めて旺盛。論文作成に傾ける情熱と知力も高水準。内容はとても充実していたと考えます。

来年度以降、アカデミック・スキルズは如何にあるべきか。今年度の経験を糧に知恵を競って参りたく存じています。

（片山杜秀）

アカデミック・スキルズ（木曜クラス）

今年度も教員３名の体制で、１年間みっちりとした学びを提供できたものと自負しています。春学期は履修者17名で、秋には３分の１の人数となりましたが、そこは精鋭ぞろい、全員完走してくれました。現状では、春・秋あわせての受講が推奨となっており、半期のみの受講を積極的に受け入れる方向に舵を切るかは、全クラス共通の検討課題です。とはいえやはり、継続して学んだ学生の進歩には目を見張るものがあり、教師冥利に尽きるのも事実です。

今回、意識的な試みとして、アカデミックな「批判」の実践に力を入れました。「批判」が非難や否定、はたまた論破とすら混同される昨今ですが、対象の正当性と限界とをともに吟味し画定するという、学問の根幹をなす振る舞いに馴染んでもらえたと思います。論文執筆の指導では、テーマを「問い」のかたちで抽出することの大事さを繰り返し強調しました。論文は、問いへの応答という形式においてこそ、論述にダイナミズムが生まれ、読み手の頭とともに、心にも訴えかける芸術作品となり、真に説得的なものとなる。半期、そして１年を経て、各人なりの仕方で、この「学問=アート」の道に踏み出していってくれたものと確信しています。

（石川学）

アカデミック・スキルズ（金曜クラス）

2023年度アカデミック・スキルズ金曜日クラスは、当初よりあまり受講生が集まらず、商学部３人、理工学部１人、経済学部１人という陣容でスタートしました。春学期はテーマの選択や論文の書き方に関する指導を経て、全員が4,000字の論文提出を達成しました。選択したテーマは、日本のアニメ映画について、若年層の政治意識について、経営倫理について、能力主義について、スマートフォンの市場シェアについて、と多岐にわたるもので、それぞれの学生が自分の興味のあることを調べて発表することができました。秋学期は履修者が一人にまで減ってしまいましたが、男性ファッションとジェンダー意識について、毎週有意義な議論を重ね、調査することができたと思います。残念ながら論文完成には至りませんでしたが、この授業での経験が受講者の今後の学習に役立つようにと願っています。

（原大地）

コンペティション入賞者一覧

■論文コンペティション

賞	クラス	学部・学年	氏　名	タ イ ト ル
金賞	水	経済・２	高梨　愛優	長期的視点から捉える日本の人口減少社会
	木	経済・１	瓜田　陽香	撮影禁止のライブがなぜＺ世代に人気なのか
銀賞	木	文・１	中山　莉緒	アフリカに興味を持つ学生の意識調査と考察
審査員特別賞	水	理工・１	小池　香澄	小学校の宿題で成績と学習意欲の向上を両立することは可能か―反復学習と自学の比較を通して―
佳作	水	経済・１	増田　　裕	ガリバー旅行記に見られるプライド観―肉体的属性の視点から―
	水	経済・２	福吉　諒吉	NLPの学問的評価と可能性
	水	経済・２	鈴木　愛実	「初音ミク」とは何か―他コンテンツとの比較からその本質を見出す―
	木	経済・１	中谷　心厚	コロナ禍でのテニス関心度とテニススクール会員数の相関性―インドアコートとアウトドアコートの比較を通して―
	木	商・１	西尾　英杜	神秘的サイエンスフィクション―神話モチーフがもたらすもの―
	木	商・１	宮内愛佳	日本におけるオリジナルミュージカル上演の現状分析

■プレゼンテーションコンペティション

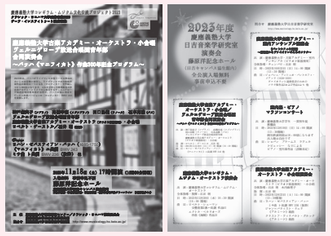
賞	クラス	学部・学年	氏　名	タ イ ト ル
金賞	水	経済・２	高梨　愛優	長期的視点から見る日本の人口減少社会
銀賞	水	経済・２	鈴木　愛実	「初音ミク」とは何か―他コンテンツとの比較からその本質を見出す―
	水	理工・１	小池　香澄	小学校の宿題で成績と学習意欲の向上を両立することは可能か―反復学習と自学の比較を通して―
銅賞	木	文・１	中山　莉緒	アフリカに興味を持つ大学生・大学院生の意識調査
	水	経済・１	増田　　裕	『ガリバー旅行記』プライド～肉体的属性から～
佳作	水	経済・２	福吉　諒吉	NLPの学術的評価と可能性
	木	経済・１	瓜田　陽香	Ｚ世代の高いライブ消費―撮影禁止のライブがなぜ人気なのか―
	木	商・１	西尾　英杜	神秘的サイエンスフィクション

※学年は受賞時

身体知・音楽

2023年度の教養研究センター設置科目「身体知・音楽」は、政府が春先に新型コロナウイルスの分類を「５類」に引き下げたため、感染症拡大に対して特段の対策を講ずることなく授業を実施することができました。開講されたクラスはこれまで同様２つで、一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」でした。授業の成果発表としてまず、前者の選抜メンバーによる、慶應義塾大学古楽アカデミー・室内アンサンブルの演奏会を10月22日に行いました。また今年度は、特別企画として、ドイツ政府の助成を受けて来日した、ヴェルニゲローデ放送合唱団青年部との合同演奏会を、身体知２クラスが協力して11月18日に催しました。これは、ヴェルニゲローデ放送合唱団青年部からの要請で実現した企画で、プログラムの中心となったのは、2023年が作曲されて300年であった、バッハの《マニフィカト》でした。ドイツの元大統領を含む多くの方々に来場していただいた、盛大な催し物となりました。また、12月23日には、声楽と器楽クラスが合同で、成果発表演奏会を行いました。

（石井明）



ゲーム学

「ゲーム学」はデジタルゲームをアカデミックに考察することを目的とした講座です。オムニバス形式をとっており、デジタルゲームの専門家を塾外より招聘するほか、理系文系を問わず、義塾教員が自らの専門分野の知見からデジタルゲームについて論じる点に特色があります。正規授業となって二年目の2023年度には新たな講師陣を加え、トピックスの幅を広げました。最終的な履修者は90名で、海外出身の学生も多く、デジタルゲームへの関心の高さがうかがえました。開講期間を通じ、約八割の学生がコンスタントに出席して講義後の質疑応答も活発でした。扱われた主題のなかではデジタルゲームにおける海外市場の重要性、日本のIP（インテレクチュアル・プロパティ）の強み、また、ハプティクス（触覚）とデジタルゲームの関係などが複数の講演に共通しており、とりわけ印象に残りました。ゲームほか、漫画、アニメ、ポップ、ミュージックなど、いわゆるサブカルチャーとして括られる分野についての研究教育活動を今後、どのように義塾でおこなっていくかは喫緊の課題です。来期以降も「ゲーム学」の授業展開を続けながら、教養研究センターの助けを借り、同分野に関する研究教育態勢の土台づくりを進めていきたいと考えています。

（新島進）

Keio Research Center for the Liberal Arts Newsletter. May, 2024. No.44

「創造力とコミュニティ研究会」

本年度はポストパンデミックの社会的包摂を視座に入れ、「コミュニティの作り手」をテーマとして３回の研究会を開催しました。

１）2023年８月22日 第20回「なぜ居場所は必要なのか」

精神障害や生きにくさを抱えた当事者たちが、既存のコミュニティの利用者で終わるのではなく、自らがコミュニティを作り上げていく例を紹介し、新たな創造の芽吹きについて共に考察しました。

２）2023年９月26日 第21回「地域のアートNPOと市民活動」

NPO法人STスポットの理事長、小川智紀氏を迎えて、行政とコミュニティ支援の関係について紹介してもらいました。STスポットは、1987年に小さな舞台運営団体として始まりましたが、2004年から横浜市の委託を受けて、市民たちの創造活動やコミュニティの支援を行うようになりました。行政と市民をつなぐ力としてのNPOの可能性と政治との関係性の難しさも紹介されました。

３）2024年１月23日 第22回「若者たちの居場所」

慶應義塾大学で長年学事を担当なさってきた服部剛久氏をお迎えし、ポストコロナの時代に、大学は学生たちの居場所となっているかという点を話し合いました。パンデミックを経て、孤独に慣れた学生たちは、対面で人と会うことに煩わしさを感じたり、オンライン上でも必ず何かに関わっている状況を作り出すことで、退屈という感触を感じられなくなっています。学生たちは対面では親切で丁寧、かつ目立つことを嫌うものの、SNSなどでは人に注目されたいという二極化が進んでいますが、この傾向を生み出したのは、行政など上に立つ者たちであることを服部氏は強調しました。

本年度も学生たちが積極的に参加し、活発な議論が交わされました。

（横山千晶）

日吉行事企画委員会（HAPP）企画

「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」とHAPP企画

2023年８月14日から19日まで集中で行われた「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」では、通学生と通信教育部の学生、計22名を迎え、「変身」をテーマに文学作品を選び、自分の中の他者の発見、他者への気付きと受容、他者との交流の中での新しい自分の構築といった視点から言語表現を分析しました。また今回は自己と他者の交流を通した変身、というテーマに基づいて、路上生活者とともに身体表現に挑む「新人Ｈソケリッサ！」主宰のダンサー、アオキ裕キ氏を講師にお招きし、身体表現の可能性を受講者とともに探る作業を展開しました。身体表現を通すことで、作品の読解は新しい視点を与えられることになりました。受講生たちは読解に基づいたオリジナルの作品やパフォーマンスを作り上げ、本年度も授業の最終発表会にて披露しました。そしてそこで見えてきた身体表現の可能性をさらにもう一段階推し進め、10月10日に日吉キャンパス行事企画委員会のダンス公演（「新人Ｈソケリッサ！ヒニヒリズム」）に受講者も参加することで、授業で読み解き、アオキ氏の演出のもとでダンス化した夏目漱石原作の「蛇」を表現し、身体知の成果を広く一般に公開しました。観客からも学生たちの躍動感と生き生きした表現力が印象的だったとのコメントをいただきました。来年度もこの言語と身体の相関関係を探る授業を展開する予定です。

（横山千晶）

教養の一貫教育

「教養の一貫教育」を実現する為の身体表現ワークショップの実践
舞踏家・今貂子による身体ワークショップ「生きること 踊ること」

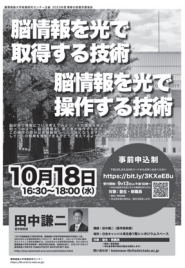
2019年度より、教養研究センターでは「高大連携」を事業計画のひとつとしました。その可能性を考える仕組みとして、本プロジェクトでは、慶應義塾高等学校と協同して、新たな教養を涵養するプログラムを模索するため、身体関連ワークショップを開催しています。言語的および非言語的コミュニケーション力の養成を意図した身体知を視野に入れた教育は、これまで既に教養研究センターの設置科目や、HAPPにおける新入生歓迎行事（舞踏公演など）でもなされていますが、今回のプランでは、プロジェクトの対象をより明確に一貫教育校とし、身体知教育を高大連携という形式で発展させていくものです。

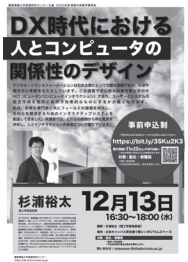
残念ながら、軌道に乗りかけた頃、新型コロナウイルス感染症によってしばらく休止をしていましたが、2023年５月より、再び実施が可能となり、2023年度は京都を拠点に活動をしている今貂子氏を迎えて、自らの身体を見つめなおすワークショップを、日吉協育ホールにおいて二日間行うことができました。

多数の人から申し込みをいただき、結果、高校生・大学生・大学院生・教職員の申込者から、定員の30名を選考しました。講師の指導によって自ら動き、同時に人の動きを見ることで、自分の身体を開放し、より豊かな身体感覚を養い、有効な身体表現を学ぶ実践的講座を実施できたと思っております。今貂子氏は、ソロの小作品を挿入しつつ丁寧に動きを解説し、さらに、高校生と大学生、教職員が同じ空間で同じ動作を共有し意見交換をすることで、参加者はそれぞれの気づきを得て、プログラムを無事終了しました。

（小菅隼人）

情報の教養学(2023年度秋学期)





2023年度秋学期の「情報の教養学」では、３件の講演を実施しました。まず、田中謙二氏（医学部教授）は、今まで行われてきた様々な実験を通して脳科学をわかりやすく解説しました。実験そのものは動物に対するものでしたが、技術的には人間に対しても可能です。しかし、人間に対して、この種のことを実施する場合、倫理面から色々と議論する必要があることを強調しました。

次に、東浦亮典氏（東急株式会社常務執行役員）は、東急線沿線を例に「まちづくり」についてまず紹介しました。そして、地域が自立するか衰退するかの条件としてどのようなものがあるかを提示しました。Smart Cityではなく、新たな造語であるWISE Cityを目指すべきであり、未来の都市が何を考えないといけないのかを議論しました。

最後に、杉浦裕太氏（理工学部准教授）は、昨今注目されているDX（デジタルトランスフォーメーション）が成功するためには、人間がどのようにコンピュータと相互作用するのかが重要な要素であることを説きました。この相互作用に関わる研究の歴史を概観した後、飲食や医療などご自身の研究事例をとりあげ、DXを成功させるための教訓を紹介しました。

いずれの講演も参加者は興味深く聴講し、質疑も活発でした。2024年度も、春に４件、秋に２件の講演を開催する予定です。

（高田眞吾）

研究の現場から

第37回「移民の社会的受入れに関するソーシャルマーカー～よりインクルーシブな社会のために～」（2023年12月8日（金）18:15～ ZOOM開催）

With increasing globalization, we have witnessed in many countries a contraction of social boundaries and a rejection of immigration. When considering immigrants, how do people in their host communities decide who is “one of us,” or a socially accepted member? On December 8, 2023, I conducted a lecture in Japanese entitled「移民の社会的受入れに関するソーシャルマーカー～よりインクルーシブな社会のために～」to attempt to answer this question.

My research identifies the criteria that host community members use to decide which immigrants are accepted in that society—for example, the criteria that Americans use when judging whether to socially accept immigrants to the same extent as American-born citizens from birth. I call these criteria “social markers of acceptance”（“SMA”）. SMA include expectations that immigrants speak the local language, follow specific social norms, or have a certain ethnicity. SMA can be achievable or largely impossible to be acquired (because one must be born with them).

The more that host society members emphasize the importance of SMA, the more exclusive their attitudes toward immigrants are. This level of exclusivity/inclusivity can change, for example, based on how threatening hosts perceive immigrants to be, or how much they think immigrants contribute economically or culturally to their community. I also described my finding that over the past 30 years, Japan seems to be growing more open to the idea of immigrants “becoming” Japanese.

I will continue this research not only in Japan but also with my team of collaborators in seven other countries, including the US, Australia, Netherlands, and Singapore. I would like to thank all who attended the lecture.

Adam Komisarof（コミサロフ，アダム）

第38回「偽りの家政ーハインリヒ・フォン・クライストの『拾い子』における家父とポリツァイ」（2023年12月19日（火）18:15～ ZOOM開催）

ドイツの詩人ハインリヒ・フォン・クライストの短編『拾い子』（1811）を歴史的文脈に即して分析しました。とある一家の崩壊を描く本作において中心的な役割を演じる家、あるいは家を支配する家父のイメージには、古代ギリシアにまで遡る家政学の影響が見て取れます。家政学の教えによれば、家の存続のためには、家父の支配のもと家の健全かつ道徳的な秩序が維持されなければなりません。秩序維持のため、生じうるリスクに対して予防的措置を講じる家父のモデルです。クライストはこのモデルの破綻を描くことによって、家政学のみならず、絶対主義的支配に対しても疑問を投げかけます。なぜならば、絶対主義の行政理論たるポリツァイ学が理想化する君主像を規定しているのは家政学における家父の姿に他ならないからです。

報告後は、愛をめぐる同時代の諸言説や、イギリス文学との関連性などにも議論が及び、大変刺激的な時間となりました。お忙しい中ご参加くださった方々にはこの場を借りて御礼申し上げます。

（橘　宏亮）

予告　第39回　研究の現場から

「研究の現場から」は、研究者交流サロンとして、教員に日頃の研究上の関心事について自由に話して頂き、参加者とくだけた雰囲気のなかで語り合う催しです。慶應義塾では、多数の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。この研究者交流サロンは、普段なかなか知り得ない研究分野の現状を知ることができる場所であるとともに、情報を交換しながら、学部や分野を越えての交流を深める機会でもあります。そこから新しいアイディアが生まれるかも知れません。どうぞお気軽にお集まりください。　（高橋宣也）

■5月～7月（予定）詳細が決まり次第、お知らせいたします。

■申　込：要

■参加費：無料

※過去の催しはこちらからご覧ください。
https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/support/series.php

4月

【全体ガイダンス】
4月2日(火)13:00～14:30　日吉キャンパス独立館DB203

【HAPP】日吉陸上競技場リニューアル記念 Enjoy Sports Day
4月14日(日)10:00～15:00　日吉キャンパス陸上競技場

【情報の教養学】第1回：高橋直大「今だからこそ学ぶプログラミングとアルゴリズム」
4月17日（水）16：30～18：00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【情報の教養学】第2回：福井健策「人はなぜ、それを未来に残すのか～デジタルアーカイブの夢と、権利、法」
4月24日（水）16：30～18：00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】祭祀遺跡から古代の出雲、杵築大社の成立を考える―神と社の考古学―
5月11日（土）14：00～16：00
日吉キャンパス第4校舎B棟23教室

【学会・ワークショップ等開催支援】日本ラテンアメリカ学会 第45回定期大会
5月25日（土）～5月26日（日）日吉キャンパス来往舎

【HAPP】今、地震がおきたら？―キャンパスで考える防災―
5月28日（火）18：15～20：15
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【基盤研究】文理連接プロジェクト第2回：杉浦孔明
7月6日(土)14:00～16:00　日吉キャンパス来往舎103･104

【情報の教養学】第4回：伊藤公平
7月10日（水）16：30～18：00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】教養の一貫教育 吉増剛造×高橋世織×マリリア「詩と音楽の交差するところ4」
9月27日（金）15：15～17：30　日吉 高等学校協育ホール

【HAPP】協生社会に向けて：なりたい自分になる―メイクアップは心の装い
秋学期　日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

5月

【学会・ワークショップ等開催支援】シンポジウム「エイジングと文学」“Ageing and Literature” Symposium
4月13日（土）10：00～17：00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【「学び場」プロジェクト】
4月15日(月)～7月26日(金)日吉図書館1階スタディサポート

【学会・ワークショップ等開催支援】ヴィクトリア朝文学・芸術の色彩革命
4月25日(木)16:30～18:00　日吉キャンパス来往舎大会議室

【基盤研究】文理連接プロジェクト第1回：大澤博隆
5月25日(土)14:00～16:00　日吉キャンパス来往舎103･104

【研究の現場から】第39・40回
5月～7月　18：15～20：00　オンライン開催

【みなさんmiraiプロジェクト】南三陸発!慶應の森からひもとく生物多様性
5月13日(月)18:15～20:00　日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】ライブラリーコンサート2024
5月15日（水）15：00～　日吉図書館
5月24日（金）15：00～、17：15～　日吉図書館

【HAPP】笠井叡舞踏公演
5月15日(水)18:00～　日吉キャンパス来往舎イベントテラス

【学会・ワークショップ等開催支援】日吉キャンパス：グリーンズテラスの景観・居心地の向上
5月又は6月　日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【情報の教養学】第3回：大黒岳彦
6月19日(水)16:30～18:00　日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【学会・ワークショップ等開催支援】一般社団法人日本人形玩具学会総大会
6月29日(土)　日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】日吉音楽祭2024
6月30日(日)14:00～　日吉キャンパス協生館 藤原洋記念ホール
10月13日(日)14:00～　日吉キャンパス協生館 藤原洋記念ホール

【学会・ワークショップ等開催支援】Development of Iwasawa theory
7月21日(日)～26日(金)　日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

庄内セミナー
8月29日（木）～9月1日（日）山形県鶴岡市

【学会・ワークショップ等開催支援】フランス教育学会 第42回大会
9月7日（土）～8日（日）日吉キャンパス来往舎

6月 7月 8月 9月

※活動予定は中止・延期・変更となる可能性があります。

私の趣味自慢？

昨年サーフィンを始めました。当然、自慢できるレベルであるはずもなく、ボードに立つのが精一杯といったところです。傍目には易々と滑走しているように見えても、いざ自分がやってみると予想以上に体力を消耗しますし、タイミングを逃したりバランスを崩したりしてなかなか思うようにいきません。コーチには、「指導する初心者としては最年長」と言われました。しかし、そんなことではめげません。波に乗り、波と一体になった時の快感が忘れられないからです。そしてサーフィンはきっと一生の趣味になると思うからです。

大学院生時代まではスキーが毎冬の楽しみでしたが、その後、出産やコロナ禍を機に行くことが難しくなってしまいました。山がダメなら海だ！ということで始めたのがサーフィンです。動かない地面の上を、立っているだけで勝手に滑降してくれるスキーとは異なり、動く波が相手のサーフィンの場合、沖を見ながら、立つのに最適な位置やタイミングを見極めなければなりません。そもそも、たとえどんなに技術があっても、波がなければ乗ることはできません。サーフィンは私にとって、大自然を前に、思い通りにならないということを実感させてくれる貴重な機会なのです。

ともあれ、波に乗らずとも、ボードに寝そべってぷかぷかと揺られているだけでも幸せを感じます。この幸福感と波乗りの快感を求めて、今年も海に行きます。

（商学部　北川千香子）

ReCLA Newsletter
May, 2024. No.44

慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts）
発行日 ¦ 2024年5月15日　代表 ¦ 片山杜秀
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1　TEL ¦ 045-566-1151　Email ¦ lib-arts@adst.keio.ac.jp
https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/